蕉門一夜口授

蕉門口授真享之弐茅一章略

俳諧の道とは十年

弐人曰俳諧は何のなるものぞや答曰

俗談平語を正しくなるべし

俳諧の為を歌連歌の為とて心ハ

向上の一路なり

蕉門一夜口授

言のもくぢ

○蕉門の本意

○古池のおく

○俳士乃廛貶

○片歌のあく

○翁自風のかゝり

○七部書のけち

○ 三物聚の論

○ 雪を主とせる句

○ 雜の類なる子細

○ 俳序の培

○ 芭蕉翁心得

碩

古人秋は悲しき風物なりとや所
柴の戸の西の方なる小窗し故なり
歌人とは俳諧律を能くせ
五七五六の型まで十七字式とな
過ぎ人々面白き型なり
此人々の目を導き古跡なるも
く面白き景色なるべし景を云ン色
事なれば止まつ國みしおんなる

[illegible] 芭蕉庵の道のこ
[illegible] 時、[illegible] 是きたれとて
友の[illegible]なりて一屋を[illegible]れ[illegible]
[illegible] 俳諧なふ[illegible]
前夜屋に[illegible]門を[illegible]る人は
屋敷 [illegible] 裏[illegible]庵の仮屋さら
に今甚備[illegible]と[illegible]常の
家居[illegible] 紙[illegible]禅林 吉[illegible]乃

心地[illegible]久[illegible]折[illegible]帰[illegible]近き
頃[illegible]此[illegible]乃人[illegible]家[illegible]文書を始
[illegible]屋[illegible]家[illegible]
野[illegible]人乃[illegible]名庵[illegible]あと[illegible]
今[illegible]風流の人も不任月雪の[illegible]
[illegible]家[illegible]橋[illegible]
[illegible]甚頃[illegible]此庵[illegible]
[illegible]野厚[illegible]此[illegible]

軒端より はぐきて 高法新地 ゆゑん
鼠盒(イヒ)の 娼家(シャウカ) 堤(ツツミ) 嘆 其人 ハ
又 野 まくみ 蕃 ゆ 一 てんと 世 ハ
廣(スタ) ゆ ゆ 亦 日 井 一 かり 次
杉 ゆ ゆ 伊丹(イタミ) ゆ ゆ ゆ 殘り
之 道 洒 堂 舍羅 車 庸 ゆ ゆ し
そ の ゆ ゆ 杉 ゆ 殘 井 ゆ 閑 ゆ ゆ と
ゆ ゆ ゆ 無 た 古 義 の 吟 魂 を 寄

い一 物 ゆ ゆ ゆ ゆ 所 物 つ ゆ ゆ
道 ゆ ゆ ゆ ゆ 形 ゆ 甚 風 翁 ハ 絶 て
ゆ ゆ ゆ ゆ 似 ゆ 合 ゆ ゆ ゆ

○故文曰 卿(キヤウ) ゆ ゆ 一 日 ハ 子 ゆ 門 ゆ 遊(シ) て
蕉門の一路 ゆ ゆ 一 ゆ 今 や 緊 寿 の
ゆ ゆ は 甚 ゆ 風 雅 奢(シヤ) 義 ゆ 流(ル) ゆ ゆ
笑 て ゆ ゆ ゆ 口 を 閉 ゆ ゆ 事 十 年

今日まで面(ヨモテ)して又まことの風遊を切望
はこの一ト夜乃物語りより正風は一筋端的(チカミチ)
ゆ度々事を得んや
答曰 茅の道を言地形を領(ナツ)ることを思
無邪(ハ)教を思ひ一言ありまよも得(ウ)直
ちにと世に新奇(ホヤ)作んふるべく
得捨べきを放下(ホウカ)せよ
問曰 今世蕉門と稱する人々の白風

悉かなる是皆俗の道ちんの作
業白いゆ附白其正風なりと云ふ
論どよ
答曰世に行る蕉風門を分るかな
色々侘とも皆是正風なり只俗理と雅
理の差ありを是を端的(チカミチ)に弘んとて
茅乃詞を設ける二十五ヶ條を云所乃
俳諧を何のかふ十ヶ条やと問ふて俗談

平結を正さんと為と答へ此たぐひと云字
弘法てすべし今の俗風の錄諸及と附合
俗語を正さんと加るよ俗中の卑俗物
郷里言を巧くいふ入ちかの此正の字腦よ
いふかをそうよいてしべ
甚うち叢自を多く形淳なる物也為も
蕉門の魂ゆうるものよ此ものよしい
古池や蛙とむ水の音

此吟有て其事乃頃の門人坊白よ依て
うち考へ正風の用を開ちとう是は白中
奇形乃珠を為うしるる此珠を心然
自ラ叢白出ぶる蕉門の寂を樂道
奇を足を山二ッの物を蕉風の叢
秘貫ク ちうち家ちいう

○二象彩ゆ 橘妾ノ字ん
曰蕉門を初て世を唱るの事一先云々

美濃乃東花坊殘て此地、平時菴也東花
坊を翁乃粧席(ヒキ)に倍(バイ)――自晤語(ゴ)らけ
ば時花を甚角を徒ら笑ふ一世俗陽ッ
皆正しく芭蕉に親詩を愛世と呼ん臺
宜(ムベ)なり為ども東花坊を通を俚俗を
引下して大に蕉門を説(トキ)度甚切ハ知――
初て考なるみはい句と扑實ッと家の
体韵ハ水ぐ孫ッて三義も長太も笑

うけんをとと屋ん云て一向(ヒタスラル)に俗談早
理損徳の街より高ッ甚頃の小集ハ只世話、
詞の俗本なも此――又見るべ沢此時
危ハ高情奇絶正――其角ッ風韵を
倩ぐ只付句の意鄭聲(テイセイ)を――流(ヨウ)言(ゲン)流れて
父子同坐して乃ち人屋よいる此両帯(リヤウヘイ)
皆是俗談を正ッの家に云ッる矢のを比弊(ヘイ)
詩を除(ケ)ハ直なるも曲なるも魂ハ沢けしる

句を蕉風なりとなす所一たハ芝又蕉風
只直なる事一のみにして此定めなりとも
月花の古き理なりも雪花の長句
なるべきものなる時を費を一門ならを
蕉門の木偶人(モクグウジン)みなを心思をもし
かなし他諧を一作の表向みて諷諫
談笑をもてすもを云ふを正風の本意を
諷諫の句を談笑の心を毎談笑なるを

俳諧のあるべきをんハ宵庵の次

○古池の句を芭蕉の発句なりをいをん

答曰 此句蕉門乃人を名ハ芭蕉の
手おををもあり左行を所只是第常ハ
吟ずして強くいををを出なるをんん
此句を正風の心ハ知を今乃人我業の
ぬきを句なり高情を作を新を蕉風の

梯階をくべし門人一論のごとく蛙五文字
山吹やとゆくハゆかしなを為ばかりも忽ち悟ッて
古池や服部や是又其頃の名作なる哉
さの句を心上ゝ考案をくれ乃
吟ずして案ずるに句解を付べきもの
慈姑の芽出ハ卿より帰ッハ生死を離と
ちんぷんハ強く此句論を云て五文字山
吟ずるよ幕より上ッたるものハ素

句ずして形ち吟や世人多くハ閑静を賞
するとして武を侘武ハ寂只々細と稱
するよりあるべし是ハ只青を笑ッの吟ゝ
古池や蛙とびこむ水の音と吟ずるとの
形ちなるに蛙を迎と云ても蛙を見るとも
ずして青の理を吟ずるとハ同じ為ニハ
青ゝ字のみにして音と云時ハ水
二義なり我等ごとき者ハ句を案ず

みハ桂苑の山 青林一とうまんし白猿啼

聞くなるに古池よりあがる蛙の音と

ゝ禅機第一義 ゝ乃ゝ六祖曹溪の

一句ゝ碓を過去の春ハ遥きて未来の春を

不響 響ハ只一聲とゝ聞屋一家うん青天

響ハ八ツ二義ゝ義ゝ音ゝ音ゝ見ゝの

山蛙のとゝ音とゝ山ゝ蛙ゝ音ゝ家ゝ義の

珠ゝ玉ゝ行ゝ べし 此意味ゝ家一生の

白ゝ山魂なゝ白ゝ山ゝ魂を見得ゝ山ゝ世ゝ

此ゝ山魂を見得ゝ山ゝ世ゝ 然ゝ他の白を

芭蕉の白註ゝ八百條章の此の中

八九十章を撰ゝ出ゝ白雪を寸ゝ

書多見くゝ此ゝ條ゝ多ゝ家ゝ者ゝ白

語の上下ゝ多ゝ家ゝ者ゝ遠を偏ゝ大切乃

事ゝ此ゝ条ゝ八格物致知の類ゝ

ゝ芝ゝ八象尾象師ゝ此ゝ人ゝ似ゝ

今世の論ゝ等ゝ是も亦偶人のかゝる所
なるべし〳〵作るべし

○同日 綾足(アヤタリ)と云ふ人とは一家と云を著し
その道を尋ねる中に婦人のかゝる大ゝ議
子の先きゝ出でゝ一家を立ての事也
是へ〳〵を是を捷径(ミチ)小筋
答曰 綾足蕉翁を和漢して俳諧を
論ずる定めて具はれるべし〳〵事を

俗諧を顧ふに俳諧なるべし
只其一門のみを俳諧と称ぜれ
ば其歌を片歌と詩を以
我蕉門の遊ぶ中也名のみをとゝるゝ
ゝ則二十五ヶ條の内二條俳諧の名を
事乃下知押て心を付べし猿(サルミノ)蓑
俳諧士乃名を是て原の四ゝ似ち
と別ゝ名を求めるる其名を形容蕉門

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遊ひを放ち[illegible]

[illegible]

○同日白尾坊と[illegible]

子を識子ゆへ[illegible]

谷曰 白尾坊を予が實の一聚集あり

貞享蕉門と稱すと識は是を予の願の価

あり什事一人[illegible]

[illegible]ハこの俳を予が實の聚

其角の編[illegible]

庶幾禪窟乃頂[illegible]芭蕉洞桃青

[illegible]

寶乃鼎よ白を煉て龍の泉よ文字を治[illegible]

かゝる蕉翁の補養の書を拾て見るを
蕉門の人よりあるを甚意を取く味ハ翁の白魂
悉ひるゝる又白尾坊曰翁に貞享元禄ゝを二人
の芭蕉ひんやと云ハ白尾坊の翁の白を探ぎ原
ゆくゝ雲と翁の一意なるを紀れた白風
を廣ゝ語ゝ世よゝ七度寒風乃
人と雲ゝ物も今於の早口接ゝ云く先ゝ月のゝ
乃ゝ家ゝ三度ゝ自享以前貞享又元禄乃

頃ゝ白ゝ雲ゝ
ひくゝは 新氏一代の説理紀迦ゝ二人ハ右ゝ
乃ゝ甚閑ゝ人ゝ乃ゝ持ゝて宗を
相弘翁の白ゝ白尾ハ氏已ゝ師ゝ酔
乃白風ゝ胸ゝ他を味ゝ語や

○翁ゝ三度の変風ゝ

曰ゝ旅中一ゝ世ゝ年譜行状の
記あるゝ大体を云く

正保元年　申　　蕉翁生　伊賀上野藤堂家中

寛文三年　卯　　翁廿歳　浪人ニテ京ニ出ル　松尾氏

延寶二年　巳　　翁三十歳

はつ霜の紙衾や一枕八洲船重

宗房と云しはこゝ也

又小村雪吟の発句あり　東都ニ赴ク

拙青坊と云

内証雑人形天皇の陵守る

なるの白ひかりしたがひ

天和二年　壬　　翁三十九歳

此比深川に住居庵を参禅の所也

古池や蛙飛こむ水の音

貞享元年　子　　翁四十歳

寒の梅　冬の日　春の日集出ル

野ざらし紀行　甲子吟行　等有

續いて　ほろ屋集有之ル

元禄二年　己巳　真州北国等行脚

おくの細道　ひさご集　猿蓑集

炭俵　深川集　二冊あり　集に出

元禄七年　戌　翁五十一歳

4年の十月は地の客舎に臥馬や

如朝の語きゝ小い甚頃より心を付て笑ふ

有つゝ元禄、年を笑の末年あれハ白風

弥、盛一熟の付乃ぬ〻ゝ　おゝゝれを生お舎

ゝゝゝ人乃足らぬハ又生ゝあゝ言葉を吐き

ゝゝゝ一ゝ頃の笑の又ゝ人なゝ友ゝと

ゝけゝゝゝゝゝれハかゝを時を

成紙とゝゝ定がゝ強て年を以て笑時を

一年ゝゝ家の俳諧ゝゝとゝのゝ

是ゝかゝゝ非ゝん秋密ゝおゝゝゝゝ

ゝ此年笑ゝ五十一行年ゝゝ笑何ゝ

ゝゝゝ事西南北の人や今や西国ゝ

杖をひき吾崎の磯伝ひして唐土船を尋ん
かとて伊賀をさして出るに大坂より舟を雇て
石立と云ハ是事未成就の門人ハ宗像
續猿蓑等の巻ハ皆門人の求に任せし
歸庵の後其人を捨て又こゝ爲の時行ん
いやと思へ至り終に遠ふして粘屋衣
の一雲にかゝ門人共閑夜の伴侶を
失ふこと歎くおのゝ好る所に風を追て

今日の猶礼に乃ち紙を乃ち貞享元年乃
頃を爲貞徒の風を雖も拙き風の一日
計起を好ム赤を深川の養ハ赤ム杉風其角
嵐雪ら輩有て此門の英士倫ルの附句
ハ甚頃の俳巻真ニ多くいづれを志ス
世ニ多ク殆年ニ及ぶ迄ハ其ハ十ニ倍の比
とやうに紀貫ニて好ム費多くれとも永き
正ーく爲の志ニ乃ち乃ち故ニ乃ハ望ン

玉つゝ花白をもはゞしひらゝゝよ貞享初門
乃時は葉よ心を盡すもうゝれい延宴天和の
和年他風ゝ白を嘆ゝ有ゝ姓氏
貞享蕉門と門人ゝ唱つゝ場人の笑と
弟子ゝ師ゝ家ゝ

○問曰 蕉門七部の書と稱する八何くそ
悉見るゝれい叶ばゞ
答曰 さゝ有ゝ七部と稱する葉家う

意よ叶ハゞ是を日頃の行状ゝ知る
二十五ヶ條も前よ四大ヶ條わゝ生口傳
傳授ゝ蕉ゝ事をゝ知て葉学ゝ言
貞享ゝ有ゝ軽き條ゝを加ゝて二十五条
ゝ而已ゝ号ゝ門人ゝ白馬ゝ
貞享武庫稱して葉ゝ家ゝ傳ゝ義
何ゝ此号ゝ門人七部ゝ
寄ゝ師ゝ今世ゝ傳和ゝ

寒の一栗　あるの日　書ける　蹟師

糖を乃　ひさお　すを　俵

ゆ此方ゆ此方を赤花坊ゆ門よハ甚角の三る結を

馬ゆ乃ゆ雲ゆ一栗をはつきて續糖簑を

加ゆ武を又東花坊乃續糖簑をきらふて

代乃ゆ深川集を以て寄るゆ方ゆ雲ゆの物ゆ

上俵を屋乃ゆ七部と定乃ゆ中ゆと

思て強て何を俵を俵を俵ゆ俵あるゆ俵

糖簑を蹟よ簑の親類ゆ残ゆと打ゆ

みゆ一栗を奇書ゆ人をして結達

ゆ乃を巻中ゆ氣凱高致乃ゆ有

○中言ゆ乃ゆ先問ン集凱を敏とをゆれ

ゆ白を物をゆ和

答曰みゆ一栗ハ集凱を敏の於ゆ世

為ゆを為ゆ物糸ゆんとゆ乃ハ

集凱　我白人乃知ラ知をゆるものハ乃級　甚角

高致（カウチ）　彩色を施さず秋酒白の色濃し

其外詩歌人の吟見る所の句を面吟乃歌

僊笑の如くなる似ると出て毎よく味へハ感動して

感嘆するに堪いる新鮮なる形容の如く

いかにも人の口に常の暇なる蕉翁の驚く

其清意味を則ち

○向曰俳意の事良解し難し俳諧と交へ

らるゝ近年事実此類を論ずるに種々乃

説（カタ）かるゝ事紀を以て問答書を出す

事紀も等閑に過ぎ等閑に過ぎ

谷曰是程迄安しと雖も議論あるも

貞徳門の所為にて蕉門の等閑

にて何を見安き事の物乃今

一書紀曙に出て来て添ふ元来蕉翁

乃志を考へ正して形を正すべ

蕉風無形を直に故に蕉翁の事を

変をし定る人を蓑の下(モト)をはなれる家乃後
ぞ隠士の好む所なるに依て蓑白も頭ち
案一入ら玉心一頭の念より楽しかりを
其頃の事を漁ハおのつゝ當事の所る
所と仕事を一見貞享の甚風やゝ
ゆ詩撰を云々翁
子ども等と童歌笑迎れむん
凡点点如雪文字ハ白水ゆる影さくさハ

老心の子孫を愛する所を行ふ事を心と
せ事ハ熟キを云々
何の事ハ和歌とも一ハ白ひ武
蓑の雪を部を入水ゆる蓑ハ月の色
仲秋の神酒ふ後の吟ふ
這ハ月ハ かゝやの下乃 ひさの琴
蟾を鮭ふ春を水ゆる蛙白を蓑五月(サツキ)の比
出羽の隠舎を吟や

昭牛角ゆかりとなりあり

牧牛を基の事なれば蓋門を雑の

白氏長慶集の新樂府多の意後篇の偏

あるを時に引歌を半書引歌なのを

意ゆえ[illegible]と[illegible]ば篇もしやうなれば

正つて引書をも用ひめ〳〵只目よ

見るを寄せて當事大半とまれば八句

是皆四字主として事實本を忘る歟

凡そ四季のうは情を家物にあつふる

蓋門事歌の意道なり

○問曰雑の句とは何ぞいふる心得よくや

おのれもいまん半か

答曰是を好まるに篇の事の定

かるを句五古章あるを雑の部と

部分——[illegible]語りやりもち事を心ゆ

せざれば歌句乃全体体て事の定[illegible]

あるとき中或又一頭の物を四季ふ詠しまる
雑の体をも仰ぎて詩歌の体をも各ゝや心上よ
趣意をうけ出るを別象と押分ゝて
拙きやかゝ所年を書ぶる事の中入ん今
者の論よりあるべからず

○問曰 悪ノ心安ノ体ハあれと合礼服
を見して會席を設キ文章を向ハ其
式を労事(ハナヲ)なしとなる也なるも意ナ

行る道あるを
答曰 心を安しなく無門の道ハ
早し都テ文章を師り席を改め像
など席よりくだ高よりて悪ノ違歌ノ
式を主として勝ちを吐ん事を西の玉
然ラハ無門ノ人の和歌ハ懼るを半
あ反其序よ隙ハこれの家道よ疑問
答在の後事よ記るをて自を立べし什問を

蕉門の和尚達は心のひがみる句を吐き程度をのべ損徳を云ふ或ハ淫事のぶれまゝる句をもして情欲を行ひ衆人の心を惑ハすかゝる人ども席をのべ座を設ケ茶門清素味を胸に持して或ハ誹諧或ハ厭世或ハ慷慨あの年月をうけ生んを雅ハ忘れまゝ詩うん早理の句を吐て宗匠乃武をうゝ知る人ハ遠ハまゝうゝ是又一和の品物なり

○問曰或ハ人の歌ふ倍で経尺を紙に筆うん
ものも和うの半なさう
答曰 勿論の事や歌連歌の武を以てせば
なやまゝ調ふへき事うゝ祝と俳諧ハ名誉
乃心を以てゆゝつれハかゝる人の衆、
廃ゝ〳〵 其書法を古人の書しうをとて
ゆゝうゝ少し〳〵ゆゝうゝめよ ひゝうふゆ〳〵まバ
書ゆゝ勝ハを墨次ぎ筆ゝ程て論ゝべ尺

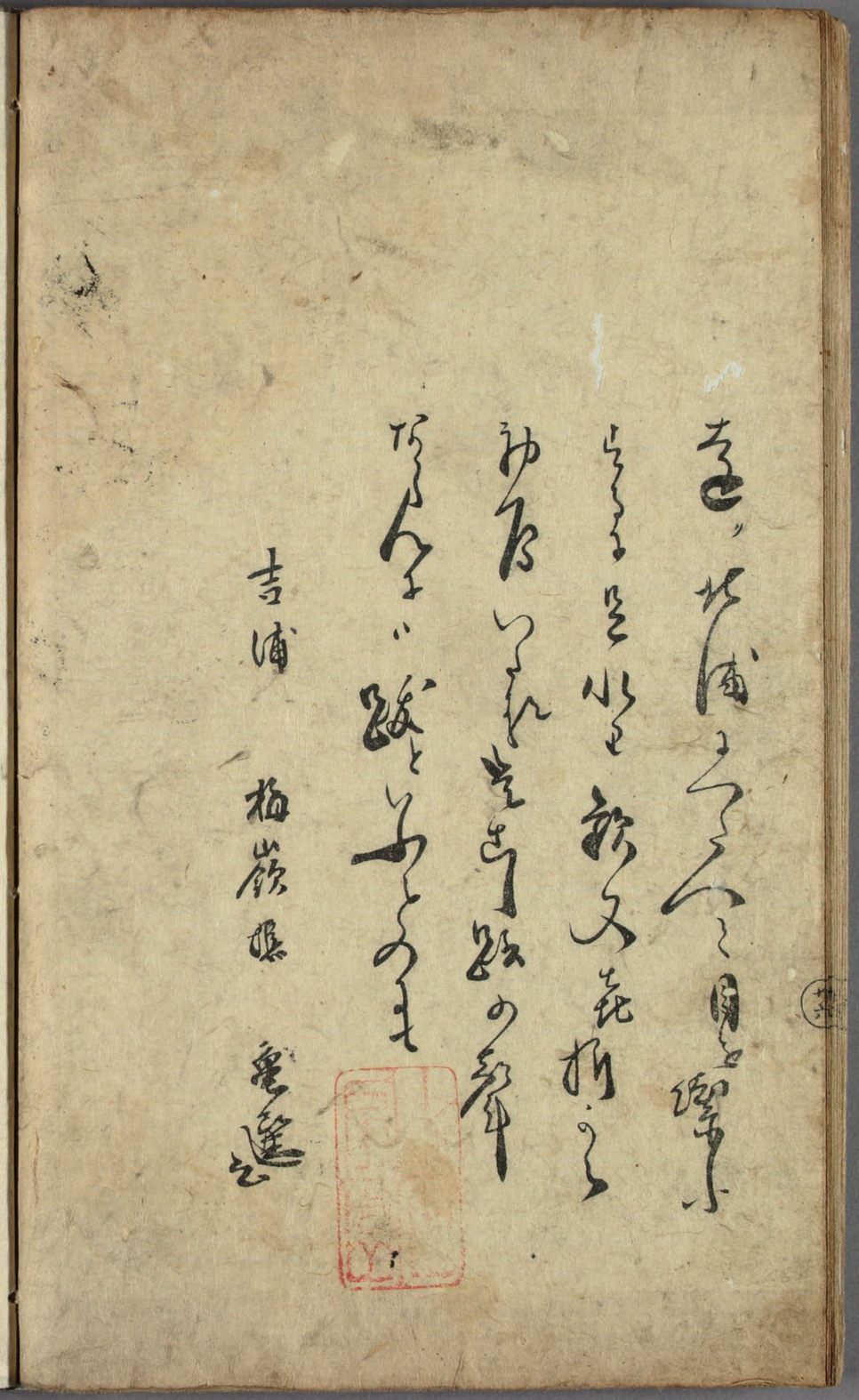
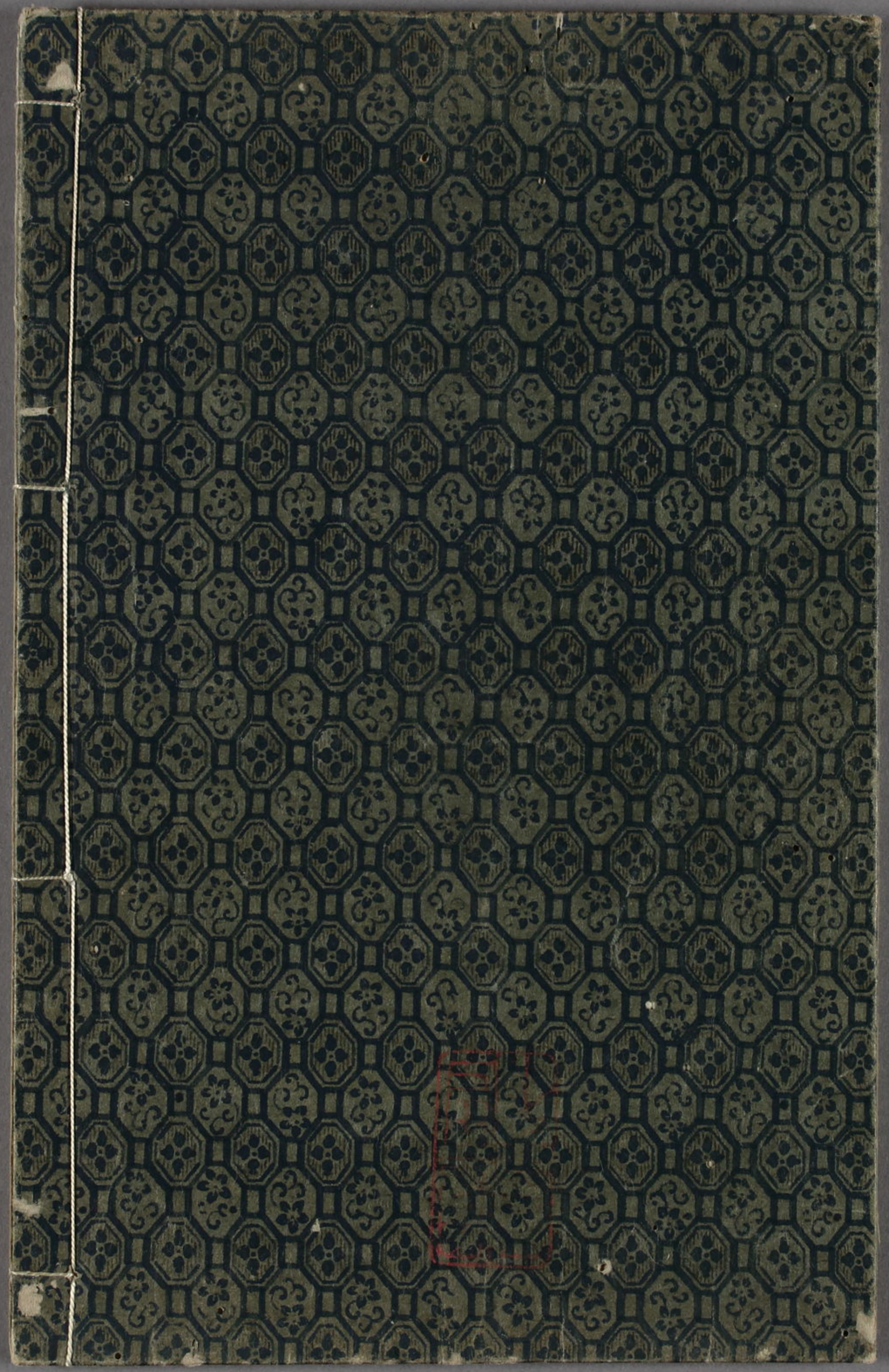
教ゆる人あらハ聖人あらんと誘引せんを
いかゝゆゑしがし是を第用集に傳て
一段の特を見るべしや
老子能(ヨク)給(ヨク)唱キ出ハ人あらんかを
待ん云ふ所毋法なるを誘(ユウ)て論じ定める
聖人の心なきもの少て我個を
云ふ事なれ彼をあへざるものを
蕉門の所先まふ思無邪の言

只事をすぐるまして其素を妙にせん
ものを愛し於ることを道を学ぶ者乃
常やなることを姿を歌連歌乃次に
立て心を向上す一段あるべしとも
学ぶなるん家よりの愚なるものあり案
今や約連歌の次に形よのこゝろ
なりて心向上の一段を要ふ徳行を
忘れまるうと此一言のこゝハ蕉門に

遊ふ世人も先んと湯手桂を
朝陽館より附して故園乃雲を
たゝふ仕るべくそめらるゝ
賛言多謝

安永二癸巳中秋
加賀　梦庵麥水述

金城乃桂産生　第一品
たゝえる名の津ふ来る古事の
為事を探し園の正伝伝
古記方乃珠を殺を出ふ
[illegible]



吉浦　梅嶺堂　重遠